受賞者の横顔

渋　谷　カツ子　　54歳(北海道・保健婦)

和寒町、未だに分娩施設をもたない町である。昭和37年～38年ごろ、母子の衛生環境は極めて悪く、妊娠中毒症も妊婦の生理的現象と放置され、妊産婦死亡・異常児発生・乳児死亡の大きな原因となっていた。母子保健への関心も認識も低いこの地域に、妊娠前の母性から妊婦・新生児・乳幼児と一貫した母子管理体制を確立させたことは、地域にとっても住民にとってもこの上ない喜びであった。

伊　藤　ミエ子　　43歳(山形県・保健婦)

丈夫な子どもを生み育てるために、舟形町で妊娠届出と同時に健康管理カードを作成。モデル的役割を果たした。妊娠・出産・育児期の母と子への熱意に溢れた保健活動は、健康で心豊かな明るい町づくりの基礎活動であることを定着させ、住民から厚い信望を受けることとなった。衛生教育の内容も実に豊富で幅広い年齢層に向けて行われている。母親教室はもとより初孫・幼児学級、むし歯予防、小学生の性教育、婚前学級、婦人健康教室など。保健に対する後進性を排除した努力は称賛に価する。

藤　　キヨ子　　44歳(福島県・保健婦)

只見町は豪雪地帯として知られ、集落もまばらな山村。母子保健の水準は低く、43年でさえ、自宅分娩はほぼ半数、妊娠届出も5か月以降が42%にも達していた。この厳しい条件の中で、各部落に保健協力員を次々に設置。健康相談や戸別訪問をしながら、家族計画指導や妊婦保健指導に最大の努力を重ね、今は人工妊娠中絶も激減し、新生児・乳児の死亡はゼロ。今後は老齢化に伴う保健事業に取り組もうとしている。

佐　藤　リヤウ　53歳(新潟県・保健婦)

三条市を拠点とする地域の母子保健の充実に30有余年にわたり、数々の業績を築いた。20年代はわが国の母子健康管理は黎明期にあたり、この時期全国に先がけて母子健康管理体系の基礎づくりを行い、胎生期から学童期まで一貫した管理と指導を実現し、その熱心な行動力は住民の理解と共感を得て、指導者としての尊敬を一身に集めている。厚生省の依頼による発展途上国への家族計画指導も業績のひとつである。

内　藤　かほる　38歳(山梨県・保健婦)

八田村は甲府から約10kmの地点にある果樹栽培を主とする農村地帯である。現在人口4,746名に対して、愛育会班は6、分班数は13、班員の数は94名を数える。勤務生活16年の成果である。各班員の健康に対する自覚と活動意欲の醸成にあたって、寝食を忘れて啓もう活動に努め、愛育だよりの発行、村をあげての健康まつりの開催等を実現。行政と民間の地区組織が母子保健事業を一致協力して推進する基盤をつくり上げた功績は大きい。

菊　池　智　子　37歳(長野県・保健婦)

看護婦として勤務した経験の中から、予防医学の重要性を痛感し、南牧村町の保健婦となり、当時無医村で保健婦未設置村に勤務。母と子の健康を守る学習グループや愛育班の育成に尽力。受胎調節への理解と認識をはぐくみ、多大な成果を納めた。また、婚前学級を青年団活動の一環として定期開催。性教育、家庭づくり、地域づくりをテーマに若者の中に溶け込んだ活動を展開している。

木　澤　光　子　47歳(岐阜県・助産婦)

すべてのお母さんに健康な赤ちゃんを――その願いが活動のエネルギーとなり地域の母子保健向上の礎をつくった。特に、ハイリスク妊婦全員を昭和36年から21年余りの間たゆまず家庭訪問し、生活指導及び食事指導を行った努力は、障害児発生防止に役立ち、大きく評価されている。また、県内の助産婦の指導研修にも専念。指導者養成に力をそそぐとともに、最近は寝たきり老人家庭の訪問に活動分野を広げている。

狭　間　歌　子　45歳(和歌山県・主婦)

昭和50年、母子保健推進員会発足以来、九度山町で推進員として母子保健向上はもとより公衆衛生活動の向上に努めた。現在、会長として指導育成をはかり、キメ細かい指導と熱意は会員の信望を一身に得ている。一人でも多くの乳幼児や妊婦に健診を受けさせるべく、戸別訪問や広報活動に力を入れ、町保健婦との連絡を密にし、疾病の早期発見・早期治療を推進。ここ7年間の努力は地域全体の水準を大きく向上させた。

内　山　彌榮子　45歳(岡山県・保健婦)

住民の健康は地域保健の充実にあることを認識し、行政への協力活動を中心として、各種検診、健康相談事業等へ卒先して協力。住民の意識を高めるために、下駄ばきで参加できる育児相談や愛育委員、民生委員、町内会長に呼びかけて幼児クラブなどを岡山市内に開設。また、乳幼児の家庭訪問の中から精神薄弱者、自閉症、情緒障害者等の担当区の障害児に対して深くかかわり、ケースの自立へ向けていち早く取り組んだ。

岡　野　和　子　44歳(広島県・保健婦)

本四架橋完成を来年に控える因島。かつては離島という地理的条件は、封建的な閉鎖社会の中で、母子保健への関心は低く、その重圧の中にあって、母子保健事業の基盤を熱意と愛情によって少しずつ築き上げ、家族計画の普及、出生前母対策、低体重児対策等をはじめ、母子指標改善に取り組んだ。市保健センターの開設・指導内容の充実に深く関与。さらに、生口地区では愛育班を育成し、島ぐるみの健康づくりのリーダーとして活躍している。

高　橋　幸　子　47歳(島根県・主婦)

出産と育児の適齢期にある若妻のグループ活動に参加することから、木次町で母子保健推進活動が始まった。自らの育児体験をもとに、勤務のかたわら栄養改善や健康管理についての研究と実践に取り組み、地域住民の健康管理活動の先頭にたって活動。愛育班を組織し、自らが班長となって研究会を開くと同時に、訪問活動も展開し、保健婦の片腕となって活躍している。後輩の指導育成への熱意は、愛育活動を支える原動力となっている。

武　藤　和　代　52歳(佐賀県・保健婦)

人口24,000人の有田町で、母子保健の核としての母子健康センターの設立に多大な尽力をした。ここ20年、老齢化する助産婦を助け、助産部門における保健婦の役割を認識。妊娠・産褥に至るキメ細かな保健指導を実施。周産期・新生児・乳児死亡率は昭和55年遂にゼロを達成。妊婦体操や母乳推進のための乳房マッサージ指導もあわせて展開し、熱心な声かけ運動により乳幼児健診は99%の高率受診を実現した。

菅　　マリハ　40歳(愛媛県・保健婦)

大三島町で地域に根ざした母子保健、家庭保健の確立をめざして17年余り。若妻コース、育児コース等の母親・育児学級の開設、成人病や家庭看護の講義や実技指導を積極推進する保健学級の開設、妊婦・乳幼児を対象とする母子健康相談事業の充実等々幅広く、特に母性保護、母子栄養強化対策には力をそそぎ、家庭訪問をキメ細かく行うなど、すべての活動の中心的存在として、エネルギッシュな活動が評価されている。

中　武　節　子　34歳(宮崎県・保健婦)

急峻な山林が多く地理的にも困難な活動を余儀なくされるへき地、西米良村にただ一人の保健婦として活躍。地域住民の健康保持はもとより、母子保健指導の強化に努め、母子健診及び相談指導、家庭訪問に、昼夜兼行の巡回が行われている。母子栄養強化事業も、村当局への積極的な働きかけが実り、48年度から全妊婦・産婦・乳児に粉乳または牛乳の現物支給を実現させ、極めて憂慮されていた母子栄養状態の改善に福音をもたらした功績は大きい。

宮　城　英　雅　43歳(沖縄県・小児科医)

沖縄県の小児保健活動の基盤づくりに、復帰前から取り組み、独自の健診システムを構築。自ら第一線で健診にあたり、乳幼児の健康管理に尽くした役割は極めて大きい。本土復帰に際し、母子保健行政をさらに充実させるために、沖縄県小児保健協会の設立に一役を担う。乳児一般健康診査を復帰間もない県内で円滑に推進できる基となった。宮古・八重山地区の乳幼児健診体制も確立され既に10年。その業績は大きい。